Billieve[ビリーブ]

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｉｌｌｉｅｖｅ［ビリーブ］

【Ｎコード】
Ｎ５４９９Ｅ

【作者名】
ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】
普通の高校生・笹垣美流（ささがきみる）はある日、携帯に知らない人からメールが来た。その人が美流の・・・。

Love1

「はぁぁああああ～～～～・・・・・」

深いため息をつき、私は椅子にもたれかかる。

さっきまでずっと先生に説教されてたのだ。

「みるみるが髪の毛茶色にするからじゃ～ん」

先生に怒られた理由はそれ。髪の毛を茶色に染めたからだ。

「まぁそ～だけど～・・・」

♪～ピロリロリン

「あれぇ？誰かの携帯鳴ってるよぉ？」

真由（まゆ）の言葉で気づいた。私の携帯だ！！・・・と。

私は急いでスカートのポケットから携帯を取り出す。

携帯を開き、メールの受信箱を見てみる。

来たメールは知らない人からだった。

「ねぇねぇ。このアド誰のか知ってる？」

「「どれどれ？」」

真由（まゆ）ともう一人の友達・菜美（なみ）が私の携帯の液晶画面を覗く。

「こんなアド見たことないなぁ」

菜美（なみ）が初めに口を開く。

「そっかー・・・」

・・・でも、このアドどうみたって男子だよねぇ・・・？

【ｒｅｎ_０２２４．ｈａｐｐｙ@＊＊＊＊＊．＊＊．＊＊】

れん・・・って男子いたっけ？

私はいちおメールを開いてみた。
その内容は・・・。
《こんちわ。これからメールしねぇ？》
・・・だった。
完璧に男子からのメールだ。
「ねぇ！これ男子からだよ？」
「「え？！」」
二人はまた私の携帯の液晶画面を覗く。
見終わったのか、携帯から顔を離す。
「これさぁ、みるみるに気ィあるんじゃないの？」
「ンなわけないって」
「そーでしょ！普通興味なきゃ送らんって！」

そう・・・なのかなぁ？

まぁ・・・いちお送ってみよっと。

《いいよ！あなたの名前は？》

「へぇ～。送ったんだぁ」

菜美（なみ）がまた私の携帯の液晶画面を覗いて言う。

「マジ？やる～。興味もっちゃったの？」

私は携帯を閉じ、スカートのポケットに入れる。

「そ・・・！そんことわけないじゃんっ！！」

私は顔を赤くする。

そんな時。

♪～キーンコーンカーンコーン

チャイムが教室に鳴り響いた。

二人はひらひらと手を振り、自分の席に戻って行った。

私も自分に席に座る。

すると、携帯が光っていた。メールが来た証拠だ。

私は先生に見つからないようにこっそりと携帯を開き、受信箱を見る。

来ていたメールはさっきの男子からだ。

《俺は蓮(れん)。お前は美流(みる)だろ？》

やっぱり　れん　って名前だ。

・・・てか、何で私の名前知ってんの？！

《なんで知ってるの？》

私はメールを送った。

返事は意外にも早く返って来た。

《だって俺お前のことずっと見てたし》

・・・何ソレ？変なの。

《そーなんだぁ。蓮(れん)君は何組なの？》

同じクラスじゃぁ・・・ないよね？

このクラスに　蓮(れん)　って名前の人いないし。

私はキョロキョロと教室を見渡す。

携帯をいじってるような人はいない。

やっぱり違うクラスだ・・・よね？

《何組だと思う？》

は・・・？そんなの知るかぁ！！！！！！

《んー・・・。A組！》

《残念！俺C組》

嘘?!C組っていったらこのクラス・・・。

《え?!同じクラス?!》

《お〜♪》

えぇ?!　蓮(れん)　って人なんかどこにもいないよ?

♪〜キーンコーンカーンコーン

いつの間にか授業が終わるチャイムが鳴る時間になっていた。

うそ?!授業全然聞いてない!!

「授業が終わる前に1つ。今日習ったこの内容、次の授業でテストするから」

「そんなの聞いてませんよ!」「そんなの聞いてねーよ!」

私は思わず立ち上がって言ってしまった。

1人の男子と声が合う。

その男子はちょっとサボりな矢口蓮榎(やぐちれんか)君だ。

ん・・・?蓮榎(れんか)・・・。蓮(れん)・・・榎(か)。蓮(れん)・・・。

え?!まさかメールの相手?!?!?!?!?!?

Love2

今は休み時間。

さっきはビックリした。

まさかメールの相手が矢口(やぐち)だったなんて・・・。

「さっきはどうしたの？急に立ちあがっちゃってさ」

菜美(なみ)が私の席に近づきながら言う。

「いやぁ～・・・」

まさか“矢口(やぐち)とメールしてた”なんて言えないよ・・・。

言ったら冷やかされるに決まってる。

「ちょっとボーッとしてたんだ」

「なんだ～そうゆう事かぁ」

よかった。なんとかバレずに済んだ。

私は確認のため、メールを送ろうと文を書いた。

《まさか・・・矢口(やぐち)？》

私はメールを送った。

でも、いつもみたいにすぐには返ってこなかった。

「ねぇねぇ！みるみる！！」

「んー？」

真由(まゆ)私の席に近づいて来る。

「恋してるってのはどうやったら分かるの？」

「んー・・・。気にしてたりとか、その人の近くにいるとドキドキしたりとか、顔が赤くなったりとか・・・。かな」

「え！マジで？」

「うん？」

どうしたんだろ？いつもの真由（まゆ）と違うような・・・。

「みるみる・・・私・・・やぐっちの事が好きみたい」

「えぇ？！」

やぐっち　って・・・矢口（やぐち）？！

それと同時にメールが来た。

《そう！やっと分かったかぁ》

も～！なんでこんなタイミングで送ってくんのよ～！！

「いいんじゃない？」

「え？」

「別に好きなら好きでいーじゃん。私は何も言うことないよ」

「みるみるサンキュー★」

真由（まゆ）は私に抱きついてきた。

・・・私は別に矢口のこと好きじゃないんだし・・・いーよね？

そうだ！

「真由。矢口のアド教えてあげよっか？」

「え？！」

《真由にアド教えていい？》

私は返信した。

ＯＫってこい！！

《真由って坂本？いいぜ》

「教えて！」

「ＯＫ」

私は真由に矢口のアドを教えた。

《ありがとぉ♪》

《美流(みる)が喜んでくれてうれしーぜ》

・・・え?!呼ぶすて?!

《なんで呼びすて・・・》

《いーじゃん♪美流(みる)も蓮(れん)って呼べよ》

そ・・・そんなっ。

私は顔を赤くする。

《だ・・・だめだよっ!そんな・・・私達恋人同士じゃないのに・・・》

私はメールと返信した後、胸がドキドキしていた。

《いーじゃん♪絶対呼べよ!》

そんなぁ・・・。最悪。

「みるみるー！やぐっちからメール来たー♪」

「ホント？よかったじゃん」

「うん。ほら見て見て！」

真由(まゆ)は自分の携帯を私に見せる。

その内容は・・・。

《やっぱ坂本(さかもと)か。よろしくな》

だった。

「こんな短い文章だけど嬉しー♪」

そっか・・・。そんなに好きなんだん。

・・・ってか！なんで呼びすてじゃないの？！

《なんで真由(まゆ)は呼びすてで呼ばないの？》

《だって俺、美流(みる)だけって決めてるし》

《そんなの決めなくていーよ！》

《いーじゃん♪》

なんか・・・。

《蓮(れん)って“いーじゃん”が口癖だよね？》

《おー！そだぜ。あ！！蓮(れん)って呼んだ。嬉しー♪》

ププッ。なんか・・・子供みたい。

最初の方は普通にメールしてたけど、なんか・・・蓮(れん)とメールするの楽しくなってきた♪

「はぁ～・・・。やぐっち、名前で呼ばせてくれない～」

「え～。どんまいやね」

真由(まゆ)と菜美(なみ)の会話が私の耳に入る。

「そういやさ美流(みる)」

菜美(なみ)が私の名前を呼ぶ。

「んー？何？」

「美流(みる)がしてるさっきの奴からのメール。あれ誰だったの？」

ゲッ！ヤバい！！

ココで蓮(れん)としてるなんて言ったら大変なことになっちゃう！

「さ・・・さぁ～。名前教えてくれないんだよね～」

「そっかぁ。そっちもどんまいだね」

そう言って、菜美(なみ)はまた真由(まゆ)と話し始めた。

ふう・・・。よかった。

私は軽くため息をつく。

・・・あれ？

携帯が光ってる。

蓮(れん)に送ってないのに何で？

私は携帯を開き、受信箱を見てみた。

・・・蓮(れん)だ。

私はメールを開いた。

《今日の放課後話そ》

《なんで？》

《話してーから》

どーしよう・・・。OKしたら真由(まゆ)に悪いよね。でも・・・。

《いーよ》

私はOKした。

なぜかは分からないけど、なんだか話したくてたまらないんだ。

真由(まゆ)・・・ごめんね。

Love3

とうとう放課後になった。

「みるみるっ！帰ろ～？」

真由(まゆ)がかばんを持って私に近づいて来る。

「あ。ごめん。用事あるんだッ。先帰ってて？」

まあ用事ってのは蓮(れん)と会うことなんだけどね・・・。

「そっかあ・・・。ならしょうがないね！ばいばい」

「ばいばい」

私達は手を振り合った。

真由(まゆ)が教室から出て行ったのを確認して私は椅子に座った。

「はあ・・・」

「なにため息ついてんだよ」

？！

背後から声が聞こえた。

私が振り向くと、蓮が自分の席の机に座っていた。

「蓮(れん)いたの？！」

「ずっといたしッ」

あら・・・そうですか・・・。

つか、なんか緊張するんですケド！

「こっちこいよ」

蓮(れん)が手招きする。

私は椅子から立ち上がって蓮(れん)の前に立った。

「中江(なかえ)ンとこ座れよ」

「・・・怒られないかな？」

「バレなきゃ大丈夫だって！」

私はおそるおそる中江(なかえ)の席の椅子に座った。

「・・・で？話しあるんでしょ？」

私は蓮(れん)に問いかけた。

「美流(みる)、好きな奴いんの？」

「え？いないよ？」

「あ。そうなんだ。よかった〜・・・・！」

へ？なんで？！

ちょい頭混乱するんですけど・・・・。

バタバタバタッ・・・・！

この音って・・・足音？！

「え！誰か来る！！」

「まぢ？！」

私達は急いで自分たちの席に座り、カバンから筆箱とノートと教科書を取り出す。

ガラッ。

教室のドアが開いた。

入ってきたのはなんと真由(まゆ)だ。

「あれ〜？みるみる？」

「ま、真由(まゆ)？！なんで・・・」

蓮(れん)も目をまるくしてビックリしている。

「忘れ物しちゃって。みるみるとやぐっちはー？」

「わ、私達授業聞いてなかったカラ補習・・・」

とっさの嘘。大丈夫かな・・？

「なんだ～。用事って補習だったんだ～」

ふう・・・。なんとかバレずにすんだみたい。

「う、うん！」

真由（まゆ）は自分の席に近づき、中に入っているノートを取り出した。

「ンじゃ！頑張ってね♪」

そう言って真由（まゆ）は教室から出て行った。

私達はそろってため息。

「美流（みる）」

「ん？」

私は振り向く。

「帰るか」

へ？！

なんか・・・キョトンとしちゃう。

「う、うん」

私はカバンにすべてを入れて教室を出た。

Love4

「それじゃぁココで」

私は蓮(れん)に手を振った。

「え?!家ココ?」

「うん」

なに?そんなに意外?

「ああ・・・そっか」

「?」

変なの。

「美流(みる)。また、メールする」

「・・・うん。待ってる」

私はにこっと笑い、家に入って行った。

玄関のドアを閉める。

はぁ・・・。

「あ。姉貴お帰り」

声をかけてきたのは弟の翔(しょう)だ。

「たーだいま」

私は靴を脱ぎながら適当にあいさつ。

そのとき、翔(しょう)が手に持っていたアイスの存在に気づいた。

「あっ！アイスいいなぁ！ちょーだい？」

「自分で取ってこいよ」

そう言って自分の部屋に入ってしまった。

つめたいなぁっ！！

ちょっとくらいいーじゃん！

私も自分の部屋に入った。

ほんっと、翔(しょう)ってクールなんだか冷たいンだか。

その時。

♪～ピロリロリン

ケータイからメールの着信音が私の部屋に鳴り響いた。

・・・蓮(れん)かな？

私はそう思いメールを開いた。

予想どうり蓮(れん)だった。

《さっきはゴメンな》

・・・へ？ナニが・・・？

私はすぐに返事を書いた。

《なにがごめんなの？》

返事はすぐ返ってきた。

《俺と話してても楽しくなかっただろ？》

・・・・・。

たしかにちょっとぎこちなくて緊張気味で会話は弾まなかった。

でも直接話せただけでも十分だったよ。

《そんなことないよ★楽しかった！！！》

《そっか。よかった♪また話そーぜ？》

・・・また？！？！

心臓がもたないよぉ。

って。なんでこんなドキドキしてるの？私。

ただの友達じゃん。

なのに・・・・どうして・・・・？

なんか・・・蓮(れん)とメールしてたら私・・・おかしくなっちゃう・・・・。

そんな私が怖い・・・。

・・・無視しよう・・・。

もう蓮(れん)とは関わらない。

私はその夜、返事をしないまま眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5499e/

Billieve[ビリーブ]

2010年11月30日03時07分発行